

新入社員へのアドバイス

三階会議室は使用禁止です。

## 序文に代えて

勤め先に配属された当初、私はデスクの引き出しにメモ帳が残されているのを見つけました。よくあるリングの付いたもので、手のひらに載るほどの大きさです。そのメモ帳はこの職場のノウハウのようなものがぎっしりと書かれていました。

このデスクを使っていた前任者の忘れ物だろうか、と、上長に確認すると廃棄するようになると言われました。

しかし、私はそのメモ帳を手元に置き続けました。

実際、まだ手順書やマニュアルも整備されていない頃でしたから、業務内容のノウハウは非常にありがたいものでした。二部の部長はうるさいが、教え方が丁寧。三部の課長は偉そうにしてるだけだ、などの愚痴交じりのメモでも、配属されたばかりの私には役立ち

ます。

ただ、メモ帳には「A棟三階会議室には右から入る」のような意味の分からないアドバイスもありました。

好奇心からA棟の三階に向かうと会議室はありませんでした。ただ、一部デスクなどが置かれていないガラんとした空間が、切り取られたかのように開けています。元はここに会議室があったのでしょうか。

一体なんだったのだろう、と私はメモ帳を読み込みました。すると他にもいくつも奇妙なルールがメモされているのを見つけました。

「B棟ロッカールームでは上を見ない」

「C棟三階倉庫で三味線の音が聞こえたらすぐに出る」

二つ目のルールを守らなかつた同僚は、居なかつたことになりました。

C棟三階の倉庫では、私だけが作業していたことになりました。

私はこのメモ帳を手放せなくなり、さらに興味を抱くようになりました。

このメモ帳はなんなのか、これらのアドバイスやルールはどのようにして集められたのか。

そして、他にも奇妙なルールはあるのだろうか。と、

そこで、私はSNSを用いて、メモ帳の中から奇妙なものを選んで、ネットの海にいくつかのルールを投稿しました。

結果、驚くほどの反応がありました。私の投稿したルールへの反応だけではなく、身近にある奇妙なルール、申し送り、言い伝え、経験談を教えてくださいる人も多くいらっしゃいました。レスポンスはどんどんと付き、通知と返信で端末は使えなくなりました。いくつかのルールは前任者のメモと似通った奇妙さを孕んでいました。私は集まってきたルールに夢中でした。

これから先の小説群は、そんな集まってきたルールを基に書かれた断片集です。

小説の場所や、企業名、人物名は伏せざるを得ませんでした。ただ、私の手元にある前任者のメモ帳、そして集まったルールやアドバイスが存在していることは確かです。

これを手にとったあなたの身の回りに、奇妙なルールがあれば教えてください。

私はそれをこのメモ帳に追加しますから、追加したいんです。

私にもっとルールを教えてください。

ルールを教えてください。

ルールが必要なんですから。

必要なんです。

あなたのルールが。

私のルールに。

ル―るを。



## 新人検査技師さんへ

都会の大学病院で臨床検査技師として働いていた俺は、ある日の休憩中、内科の佐伯教授に呼び出されました。なにかとネチネチしたところのある教授なので、ミスでもしていたら面倒です。休憩時間いっぱいまで厭味<sup>いひみ</sup>つたらしい説教を聞く羽目になるでしょう。

俺はここ数日の自分がやった仕事を振り返り、ミスなんてしたはずはないと思いつつ、内心ビクビクしながら教授のところへ行きました。すると、教授はとびっきりの笑顔だったのでひとまず胸をなでおろし、安心しました。

「やあ、田口<sup>たぐち</sup>くん。キミに折り入って相談があるんだが」

田口というのは俺の名前です。それを聞いた時、安心したのも束の間、少しだけ嫌な予感がよぎりました。教授は人にものを頼むとき、必ず笑顔で相手の名前を呼ぶのです。特

にその頼み事が面倒なものであるほど過剰とも言える笑顔でそうしているのは院内の誰もが知っていることでした。それが彼の身に着けたここでの世渡りの仕方なのでしょう。

教授は笑顔を崩さぬまま続けます。

「私の地元の診療所に勤めている検査技師が離職して、欠員が出たそうなんだ。そこは小さな診療所で、検査技師もひとりで回っていてね。是非とも先方に田口くんを紹介したいと思っているんだが、どうかかな？」

「ええと、それは、いつぐらいから」

「できるだけ、すぐがいいな。それこそ来週ぐらいには」

「ずいぶん急ですね」

「田口くんなら経験も実力も申し分ないし、身軽な独身だろう？」

教授は覗き込むような上目遣いで俺の顔を見つめてきます。

初老のおっさんのそんな表情など気色悪いことこの上ないのですが、そんなことより怖いのが、その視線には「まさか私の頼みを断らないよな」という無言の圧が感じられるところでしょう。要するに、地元に対して自分の顔を立てろ、と言っているのです。

一方、俺はというと、「身軽な独身」という最後の余計な一言だけは気になったものの、

正直、願ってもない頼みではありません。

というのも、大学病院というのは医療ドラマや小説なんかでよく描かれているように、とにかく派閥争いや出世競争の激しい世界なのです。医師でない俺にとつてはあまり関係ない争いなのですが、周囲のギラギラした雰囲気には相当辟易（へきえき）していましたし、ストレスの元にもなっていたのは確かです。

それに、臨床検査技師というのは医師の指示のもと、診断や治療に必要なデータを提供する仕事です。院内政治的に対立する医師同士の板挟みにでもなろうものなら目も当てられません。

もちろん、同業者同士の関係というのもあります。俺は取り立ててコミュ障というわけではありませんが、この大学病院には二十人以上の臨床検査技師がおり（百床あたり二名くらいというのが一般的で、ウチの病院は千床以上。二十四時間シフト制）、それだけ人数がいればいろんな奴がいるものです。

あつちこつちの教授にペコペコしながら少しでも良く思われようと上手く立ち回る奴もいるし、つまらないことですつと仕事中に愚痴を言ってきたはこちらの気分を害してくる奴もいます。一方、どちらかというと俺は黙々と仕事をこなしたいタイプなので、シフト

によつてはちよつと煩（わづ）わしい思いをすることもありました。

そんな面倒な人間関係からも早く逃げ出したかったところでした。もしかしたら教授にもそれがバレていて、覇気がない奴、チームワークに適さない奴と思われていたのかもしれない。

ただ、そんな厄介払いだったとしても、一刻も早く環境を変えたかった俺には都合が良かったと言えるのです。

そうして俺は二つ返事で教授の申し出を引き受け、教授の提案通り、数日後には引越すことになりました。

教授の地元というのは、山に近い片田舎の小さな町でした（場所の特定を避けるため〇県としておきます）。取り立てて過疎化しているというわけでもなく、住民もそれなりにいる、自然が豊かで気持ちのいい場所です。

教授の口利きで用意してもらった小さな一軒家も、築年数はそれなりにいってそうです。が、手入れが行き届いており住み心地は良さそうでした。むしろ、元々住んでいた都会の狭い1DKのマンションに比べたら十分すぎるほどの広さと間取りがあつて、独り身の俺には持て余すくらい贅沢すぎる豪邸と言えるでしょう。これで家賃は庭つき駐車場つきに

もかわらず以前の半分以下なのだから文句のつけようありません。

買い物などは不便なところもあるでしょうが、少し車を走らせれば大型スーパーマーケットがありますし、ちよつとした日用品くらいなら近所にある個人商店で済ませられます。ここならきつと余計なストレスを感じることもなく生活できそうだと、引越し早々思うことができました。

そうして、荷解きを終えた俺は、早速明日から出勤する新たな職場を楽しみにしながら眠りにつくことにしたのです。

翌朝、あらかじめ買っておいた惣菜パンだけの簡単な食事を済ませ、初出勤に出かけようとした俺は、玄関ドアの郵便受けに一通の封筒が挟まっていることに気がつきました。

切手も消印も見当たらないその封筒には、『新入検査技師さんへ』と手書きの文字で記してあります。昨晚、寝る前に戸締りを確認したときにはなかったので、今朝早くに差出人から直接届けられたものでしょう。

俺は少し違和感を覚えました。人付き合いの濃い田舎では直接届けに来るなどよくあることなのかもしれません。このあたりにわざわざ移住してくる人も少ないだろうという

のは容易に想像できますし、診療所に新たな検査技師がやってきて、どこに住むなんてことも、小さなコミュニティの中ではすぐさま噂で広がるはず。こんな手紙の一通くらい、郵便屋さんに任せるよりも、このほうがはるかに手間がかからないというのは、少し考えれば当然のことでした。

俺はすぐにそう思い至って車に乗り込みます。運転席で封筒の中を覗き込むと、一枚の便箋が三つ折りになって入っていました。それを取り出して開き、書かれている文章にサツと目を走らせてみます。

するとどうやらこの手紙は、差出人の名前はないものの、前任の検査技師からの引継ぎ事項のようでした。ところが、その内容は短く、そしてあまりにも奇妙なものなのです。

『新入検査技師さんへ』

・検査機器メ後に「お願いします」と言われても振り返ってはいけません。

そこには医者も看護師もいません。

・作った覚えのない標本を顕微鏡で覗いてはいけません。

・とった覚えの無い心電図のデータはすぐに削除してください。』

何度か読み返してみましたが、まったく意味が分かりません。三つの箇条書きはどれも普通に考えればありえないことばかりだったからです。これは控えめに言っても怪文書の類と言えるでしょう。

頭の中に『?』マークが浮かんだ俺は、とりあえず便箋を封筒に戻して助手席に放り投げ、新たな勤務地である診療所に向かって車を走らせ始めました。

イタズラだろうか。いや、そうだとしても気にすることはない。きっと前任者はこの手のブラックユーモアが好きな人物だったんだろう。

そう思うことにしました。それにしてもあの事務的な文章から得体の知れない迫力が感じられました。それ以上深く考えるのはやめました。

診療所に着くと、俺は車を『職員用』と書かれた駐車場に停めて、小さな入口から待合室に入っていました。すると受付にいた中年女性の看護師さんが俺に気づき、挨拶をしてくれました。

「ああ、田口さんですね。おはようございます」

「おはようございます。今日からこちらでお世話になります。よろしく願います」

「ちよつと待つてくださいね。今、先生を呼んできますから」

そう言つて、看護師さんはスリッパをパタパタと鳴らしながら奥へと入っていきました。そのあいだ、待合室の中を少し見回すと、休診日が手書きの赤ペンで記されたカレンダーや地元の小中学生が図工や美術の時間で描いたと思しき絵が飾られているなどアットホームな雰囲気です。建物自体は古いものの、いかにも田舎の診療所といったどこか温もりを感じる風情がありました。大学病院のように冷たさを覚える無機質な明るさとは違い、この場所は地元の人々の大切な生活の一部なのだと思えて、穏やかなやる気が沸き起こってくるのを感じます。

こうした感覚を得たのは、臨床検査技師になって初めての経験かもしれません。

しばらく待つと、先ほどの看護師さんが白衣を羽織った初老男性を連れて戻ってきました。

「こちらが当診療所の瀬川先生です。私は看護師の葛西といいます」

「よろしく願います」

俺は瀬川と紹介された医師にお辞儀をしながら挨拶しました。すると瀬川先生は優しく

俺の肩に手をポンと置き、挨拶を返してくれます。

「よろしく。佐伯先生からは優秀な検査技師さんだと伺っていますよ」

たとえお世辞だったとしても、佐伯教授からそのような伝えられているのは悪い気はしませんでした。鼻の先がむず痒くなつたので、人差し指で軽く触れながら、俺は「そんなことはありませんが」と謙遜して答えます。

「ここは田舎なので都会の大病院に比べたら退屈かもしれませんが、地域の住民にとつては大切な診療所ですので、これから一緒に頑張りましょう」

「もちろんです」

話聞いたところによると、瀬川先生は大学時代の佐伯教授の一年後輩なのだそうです。それにしても、同じくらいの年の頃で同じ医師にもかかわらず、身を置いている環境でこれほどまでに顔つきが変わるものだろうかと思えるくらい、瀬川先生は穏やかで柔和な物腰の方でした。

俺もあのまま大病院にいたら、いつか佐伯教授のように人を品定めするようなギラついたり、厭味つたらしい顔になつていたのかもしれない。それを思うにつけ、あらためて、ここに来てよかつたと思えるのでした。

こうして挨拶を済ませると、俺の新たな主戦場となる臨床検査室に案内してもらいました。

そこはロビーから入った診察室の奥にある廊下を一度右に曲がって突き当たり、簡素なドアを入った場所にありました。ドアの横には廊下に面したガラス戸の窓口があり、検体置き場と思しきトレーが置いてあります。ここから検体や検査結果を受け渡しますのでしよう。専門的なことは端折りますが、大病院ほどではないにしろこの規模の診療所としては検査機器も申し分なく、不便はなさそうでした。

それから簡単な引継ぎを受けて早速業務開始となりました。

来院する患者さんは、俺の感覚で言えば多くも少なくもなく、大病院の目が回るような忙しさとは天と地の差がありました。割合で言えば年寄りが多く、病院で『常連』という言い方はおかしいかもしれませんが、定期的に通っている地元の人ばかりです。

雰囲気的に病院というよりは地域の集会所のような印象を覚えましたし、事実、そういった側面もあるのかもしれませんが。

そのため、時折こちらまで回ってくる検査も目新しいものや難しいものなど特にありま

せんでした。とはいえ患者さんによって症状も病気の進行具合も違うので、その人に合った治療方針を出すための検査結果についてはこちらもしっかりチェックし、気になることがあればデータを示して瀬川先生に正確に所感を伝えます。

瀬川先生も俺の話にうんうんと頷きながら耳を傾けてくれるため、あまり患者さんとは顔を合わせない仕事とはいえ、こちらもしっかりひとりひとり向き合っている実感が持てました。やっぱり俺はこういう環境を求めているのだな、と改めて思います。

ずっと、こんな感じでゆったり働きながら生きていけたらいいな――

気づけば、まだ転勤してきたばかりでここまで思ってしまうほど、もう俺はこの町と職場を気に入っていたのでした。ただし、午前中の診療時間が終わり、昼休憩を終えて臨床検査室に戻ってくるまでは……

ちよつとした違和感に気づいたのは、待機モードになっていたパソコンを立ち上げてデスクトップ画面を見たときでした。

いくつかの整理されたファイルから離れた位置に、見慣れないデータのアイコンが表示

されていたのです。それは、心電図のデータのようにでした。

もしかしたら、昼休憩中に瀬川先生から共有されたのかもしれない――そう思った俺はなんの疑いもなくそのデータを開きました。

すると画面には専用のソフトが立ち上がり、心電図が表示され始めました。しかしそのデータには患者の名前も生年月日も書いておらず、いつ検査が行われたのかも記録されていませんでした。

ただその波形を見て、俺にはすぐにこの患者に狭心症の疑いがあることがわかりました。ところが、その直後に俺は目を疑いました。

左から少しずつ表示されてくる心臓の波形が、あるところで完全に止まって直線を描くのみになってしまったのです。つまりこの患者は心電図を取っている検査の最中、亡くなってしまったことを意味します。

なぜ、こんなデータが送られていたんだ……？

俺はすぐに瀬川先生に確認を取るため、臨床検査室を出て診察室に向かいました。

「先生、先ほど共有していただいた心電図のデータですが」

「心電図……？ 送っていませんが」

「え、そんなはずは……患者さんの名前も日付もありませんでしたが、こちらのパソコンには確かに……」

すると瀬川先生の表情が途端に陰しくなり、俺の目をまっすぐ見据えて言いました。

「それを開いてしまったのですね？」

「……はい」

「わかりました。見せてみなさい」

瀬川先生は俺の横を素通りし、足早に臨床検査室へと入っていきます。

もちろん俺もその後を追いました。そして瀬川先生は、俺のパソコンに開いたままの心電図データをしばらく見つめると、無言のまま再び臨床検査室を出ていってしまいました。開いたままのドアの向こうからは診察室の隣にある受付でボソボソと何かを話している瀬川先生の声が聞こえてきます。

俺には聞いてはいけない内容のような気がして、臨床検査室から出ることができませんでした。

瀬川先生の話し声が終わると、葛西看護師がどこかに電話している声が聞こえてきます。彼女の声は甲高く、よく通るので、少しだけ話している内容が届いてきました。相手は町の中心部にある総合病院のようで、急患があったときの受け入れ態勢の確認を行っているようでした。

俺にはどういふことだか全くわかりませんでした。穏やかだった午前中に比べ、午後

の診療時間は得体の知れない緊張感が漂っていました。

そして、事が起こったのは終業時刻が間近に迫った夕方頃でした。診療所の外がにわか騒がしくなつたかと思うと、工事現場の作業員らしき男性が中に駆け込んできて受付で急患だと叫んだのです。直後、担架に乗せられた制服姿の警備員の男がロビーに運び込まれてきました。

作業員によると、この警備員は診療所近くの工事現場で突然倒れて動かなくなつたとのことでした。俺が一目見ただけでも、心筋梗塞などが疑われ、危険な状態だということはわかりました。

瀬川先生はすぐに運んできた作業員たちに、患者を診察室に入れてベッドに寝かせるよう指示します。そして意識の有無や瞳孔の確認など一通りのことを終えると、心電計に繋

ぎ、ここでできるだけの救急措置を行いました。幸いなことに、まだ心臓は動いているようです。

しかし、診療所では、この重篤な状態の患者にできることも限られています。おそらく葛西看護師が救急車を手配し、より設備の充実した大きな病院に移すことになるでしょう。

俺はそうなった時、救急隊員に現在の状況をできるだけ正確に伝えられるよう、心電図を確認するため臨床検査室へと戻ります。持病を調べ、今後の治療方針を決める材料となるデータを取るのです。

ところが、表示された心電図を見て、俺は背筋が凍りました。なぜならその波形は、先ほど見つけた謎のデータと寸分違わずまったく同じだったからです。狭心症の疑いという特徴があったため、見間違えるはずありません。

俺はすぐに瀬川先生のところに戻ろうとしました。その時です。外から救急車のサイレンが聞こえて来たかと思うと、診療所の前に停まりました。

——もう来たのか!?

俺が外に出ると、すでに患者は救急車の担架に移され、瀬川先生は救急隊員に申し送りを行っていました。

受け入れ先は町の中心にある総合病院とすでに話がついている、という言葉が耳に入ってきました。先ほど、葛西看護師が電話していた総合病院です。

急患が横たわる担架を運び入れた救急車は、すぐさま再びけたたましくサイレンを鳴らして去っていきました。その迅速さといったら、まるでゲリラ豪雨のようでした。

俺にはまるで、瀬川先生も葛西看護師も、この急患が運ばれてくるのがあらかじめわかっていたかのように思えました。救急車が来るのも、この診療所のある場所を考えるとあまりにも早すぎました。

工事現場の作業員が駆け込んでくると同時に、それよりも早く報せていなければ、これほどの速さでやってくるなどありえないだろうと思えるほどに……

瀬川先生は、再び訪れた静寂の中でぼんやりと立ち尽くしている俺の顔を見ると、神妙な表情を浮かべ、こう言いました。

「残念ですが、あの患者は助からないでしょう」

それを聞いて、俺は妙に納得してしまいました。なぜなら俺も、どこかでそんな予感が

していたからです。きっと、あの謎の心電図のデータは、本当に見てはいけなかったのだったのでしよう。この時、俺はあの便箋に記されていた文章を思い出していました。

『・とった覚えの無い心電図のデータはすぐに削除してください』

あれは怪文書でもブラックジョークでもなく、ただ事実が書かれていただけだったのではないでしょうか。俺はそれ以来、あの手紙に書いてあることを守らなくてはいけないと胸に誓いました。

初出勤のこの日以降、不可解なことはまったく起こらず、平穏な毎日が続きました。俺はすっかりこの町と診療所に慣れ親しみ、顔見知りも増えていきました。

そうして、転勤してから数か月が経った真夏のある日のことです。

診察時間終了の十八時が近くなり、最後の患者の診察が終わると、俺はすべての検査機器を順番にめていきました。いつものことです。これが終われば、あとは帰るだけでした。家の冷蔵庫の中が空っぽで、帰りに大型スーパーに寄るつもりだったため、少し急いで

いたというのがあります。自炊の習慣ができたのも、こつちに引越してからのことでした。

以前勤めていた大病院時代には身体的にも精神的にも疲れていて、そんなことをする気にはまったくありませんでした。しかも遅い時間までやっている飲食店が多かったのです。わざわざ自炊する理由なんてひとつもなかったのです。

一方、こちらの生活では余裕が生まれ、今ではレシピを見ながらちよつと凝った料理に挑戦するのが趣味になっていました。

さて、今晚はなにを作ろうか。

そんなことを考えながら最後の機器を~~め~~終えた、まさにその瞬間でした。

「お願いしまあす」

女性の声が背後の窓口から聞こえてきました。この甲高い声は葛西看護師でしょう。俺は「しまった」と思い、壁にかかっている時計を見ました。十八時は五分ほど過ぎていましたが、駆け込みで急ぎの検査が入ることも大病院ではまありません。

しかしこつちに來てからはまだそういったことがなかったため、買い物に行くことばかりに気を取られ、少しばかり早まってしまったようです。

「はあいつ！」

俺は誤魔化すようにやや過剰なほど元気よく返事をし、振り返りました。

ところが、俺はすぐに違和感に気づきました。振り返った窓口の外に葛西看護師はおらず、また窓口の検体置き場にも、なにも置いてはいなかったのです。

こんなことは初めてでしたが、俺はすぐに「これか」と思い出しました。

『・検査機器ノ後に「お願いします」と言われても振り返ってはいけません。

そこには医者も看護師もいません』

転勤初日、誰かから届いた手紙にあった文書です。

ただ、いくらなんでも本当にこんなことが起こるとは思っていなかったため、俺はドクドクと心拍数が高まっていくのを感じました。声は、確かに聞こえたのです。

俺は念のため、臨床検査室を出て診察室に行ってみました。そこには、帰宅する準備中の瀬川先生がいました。

「先生、ちよつといいですか」

「どうしましたか。少し顔色が悪いようですが」

「えつと……今、葛西さん、臨床検査室に検体を持ってきませんでしたか？」

すると瀬川先生は事もなげに答えました。

「いいえ。最後の患者さんはお薬を処方しただけで、検査はしていませんから。それに葛西さんはもう帰られていますよ」

俺は耳を疑いました。葛西さんがすでに帰っているということは、この診療所に残っているのは俺と瀬川先生だけということになります。つまり、女性の声が聞こえるはずなんてないのです。だったら、俺がさつき聞いた声は一体なんだったのでしょうか……

この時、俺の頭にひとつの考えが思い浮かびました。

勤務初日、瀬川先生は俺が謎の心電図のデータを見た際にその後何が起こるかを知っていたようでした。だとするならば、たつた今起きた怪異のことも知っているかもしれませぬ。

「先生……ちよつと変なことをお聞きするのですが」

「なんででしょう」

「こちらに移ってきた初日に、妙な心電図のデータを開いてしまったのを覚えてますか」

「ええ」

「あの時、先生と葛西さんは何が起きるのかをあらかじめわかっているようでした」  
すると、瀬川先生の表情がピクリとわずかに動きました。

「……偶然ですよ」

「運ばれてきた患者さんは助からないだろうって仰いました。あの後、患者さんはどうなっ  
たんですか」

「聞いていません」

瀬川先生の言葉からは、明らかに俺の質問を拒絶する意思が感じ取れました。知らない  
ほうがいい、ということなのでしょう。しかし、俺は食い下がりました。

「先ほど、確かに臨床検査室で『お願いします』と女性の声が聞こえました。先生は何か  
知っているんじゃないですか」

「疲れているわけではありませんか？ きちんと眠れていますか？ 都会から急に環境が変  
わって、あなたも気付かないうちに心身に負担がかかっていたのでは？」

「そんなことはありません！」

思わず、大きな声が出てしまいました。一度興奮状態になると、疑問に思っていたこと  
がさらに口をついて出てきます。

「確かに聞こえたんです！ それに、あの警備員さんが運ばれてきた時、なぜ救急車はあ  
んなに早く到着することができたんですか。搬送先の総合病院だって、話は通っているつ  
て。急患が来ることがわかっていなきや、そんなことできないでしょう！ 事実、先生と  
葛西さんはあの心電図のデータを見た直後に総合病院に電話をかけていました。あの心電  
図のデータは一体なんだったんですか!? それに、さつき俺が聞いた女性の声はなんなん  
ですか!？」

「落ち着きましょう。ちゃんと話は聞きますから」

一旦言いたいことを全部ぶちまけてみると、瀬川先生が困ったような顔をして自分を見  
つめていることに気付くことができました。俺はなんだか申し訳ない気持ちになり、すぐ  
に頭を下げて瀬川先生に謝罪します。

「すみません。変なことを聞いてしまって」

「いえ、いいですよ。ほら、深呼吸して」

言われるままに、俺は深くゆっくり息を吸い込み、そして肺が空っぽになるまで吐き出  
します。そして再び、今度は普通に息を吸ってみると、跳ね上がった心拍数が徐々に落ち  
着いてきて、頭に上った血もスーッと下りてくるのがわかりました。

俺はもう一度、瀬川先生に頭を下げました。

「すいませんでした……」

すると瀬川先生は俺の肩に優しく手を置き、顔を上げるよう促しました。そして優しく語り始めました。

「あの時、救急車が迅速に到着できたのは、警備員さんの異変に一早く気付いた工事現場の作業員さんがすぐに通報してくれたからです。その前に、総合病院に葛西さんが連絡を入れていたのは、普段から定期的に行っているものです。ウチのように小さな診療所は、なにか起こった時に町の総合病院との連携が必須ですから。それがたまたマイミング的に重なっただけですよ」

「じゃあ、あの心電図のデータは……？ さっきの声は……？」

すると瀬川先生はニッコリ笑って言いました。

「なにしろ古いパソコンなので、たまに壊れたデータがデスクトップに表示されるバグが起こるようです。あなたの前任の検査技師さんからは聞いていたのですが、予算も限られているもので、申し訳ありません。お伝えしておけばよかったですね。声のほうは、実はさっきラジオの操作を誤って、音量を上げてしまっただけです。きつとその音が臨床検査室

まで届いてしまったのでしよう。すいません、勘違いさせてしまいました」

瀬川先生のデスクに視線をやると、確かに、今は電源が切られており何も聞こえない、小型のラジオが置かれていました。

俺が聞いた「お願いしますあす」という声は、女性MCの声だったというのです。

「さあ、これで信じてくれましたか？ それじゃあ帰りましょう。ただ、もしまだ不安感や疲れが気になるようでしたら、軽めの精神安定剤を処方してあげますけど」

「いえ、大丈夫です……」

妙に言いくるめられた気がして釈然とはしませんでした。これ以上問い質すのもおかしいと思い、俺はこのまま診療所を先に出て、車に乗り込みました。

結局この日は料理をしようなんて気分にはならず、閉店の準備をしている商店に駆け込み、夕食の惣菜と明日の朝食のパンだけを買って、帰宅したのです。

それからというものの、これらの不思議な出来事は数日に一度くらいの割合で起こるようになりました。

ですが、はじめに誓った通り、取った覚えのない心電図のデータを見つけたら、すぐに

消去するようにしてしまし、検査機器を戻した後呼びかけてくる声が聞こえたとしても、返事はせず、振り返ることもしませんでした。

ただ、検査機器を戻す前には自分だけで判断せず、瀬川先生と葛西看護師にいちいち今日の検査はすべて終わったかどうかの確認をに行くようになったため、もしかしたらふたりには「真面目だけど融通の利かない変な奴」と思われていないかだけは少し心配ではあります。

最初のうちはいちいちあの手紙のことも頭の中でチラつきました。ですが、しばらく経つて慣れてしまうと、もうそれが当たり前のごととなり、「そうしなければならぬ」とわざわざ意識することもなくなっていました。

そのため仕事や生活も気持ちが悪くなって、心に不穏な波が起こることもなく、愛すべき平坦で退屈な日々を過ごせるようになったのです。

もちろん、勤務中気にならなくなっていたというだけで、この町に引越してきたばかりに届いた、あの手紙については未だに不可解だという思いが消えたわけではありません。

あれは、本当に前任の臨床検査技師さんから届けられたものだったのでしょうか。ある

いは瀬川先生や葛西看護師からのものとも考えられます。

しかしそのふたりが差出人だったとするなら、これまでの不可解な出来事が起こった時に、「手紙に書いていたでしょう」などと話題にならなかつたことのほうが不自然な気がします。第一、ふたりは初出勤の日には俺の名前をすでに知っていました。『新入検査技師さんへ』などという回りくどい書き方はしないはずでしょう。やはり、前任の臨床検査技師さんからの手紙だと考えるのが自然のように思えました。

俺は手紙のことを、そして前任の臨床検査技師さんのことを瀬川先生や葛西看護師に聞いてみようかと何度も思いました。

しかし、そうすることによってまた何かが起こり、今の平和な暮らしに暗雲が立ち込めることのほうが嫌でした。

そのため、この件についてはなにも聞かないままにしていることにしたのです。

そんなある日のことでした。

診察時間が終了し、例によって今日の検査はもう残っていないことを確認した俺は、臨床検査室に戻り、検査機器を戻しました。この日、瀬川先生は町の医師との懇親会があ

るとかで、確認しに行ったときにはもう帰り支度を済ませていました。

葛西看護師はいつも基本的に帰りが早く、瀬川先生よりも先に診療所を後にするのが通例です。つまり今、診療所に残っているのは俺だけということになります。こういうことは別に珍しいわけでもなかったたので、俺もなるべく早く片付けを済ませて診療所の鍵を閉め、帰ることにしていました。

ところが、この日の異変はいつもと少し様子が違っていたのです。

それは、検査機器をすべて終了した直後のことでした。

「お願いしまあす」

誰もいないはずの受付窓の外から、女性の声が聞こえてきました。これももう慣れたもので、俺は無視して振り返らないようにしていました。ところが、しばらくすると「コトリ」と検体置き場に何かを置く音が聞こえました。

——そんなバカな。

俺は思わず振り返りそうになりました。

しかし、先ほど確かに葛西看護師がもう帰っていることを確認したのです。まさか検査機器をベているあいだに戻ってきて、出し忘れていた検体を置きに来るなんてことはありません。

それでも、検体置き場からは「コトリ、コトリ」とまるで催促するように音が鳴り続けます。

「お願いしまあす」

——コトリ、コトリ。

「お願いしまあす」

——コトリ、コトリ。

こんなに無視しているのに、女の声のトーンはまったく変わらないのが余計に不気味に感じられます。この声は、俺に一体なにを渡そうとしているのでしょうか。考えたくもありません。それでも女の声は、俺の意など解さぬように、ずっと同じ言葉を繰り返してきます。

「お願いしまあす」

——コトリ、コトリ。



ガシヤアンツツ!!

ガラス容器の割れるような音に反応し、俺は反射的に受付窓のほうを振り向きました。

ところが、やはりそこには誰もおらず、また検体置き場にも検体はおろか何かが割れた破片や残骸なども残されてはいなかったのです。

臨床検査室は突き当たりにあるため、ここから立ち去るにしても廊下を一度曲がり、診察室を通って待合室に出なければ診療所の出口には辿り着けません。

普段スリッパをパタパタ鳴らしながら行き来する葛西看護師や瀬川先生はおろか、たとえ裸足になっていたとしても、ひんやりとした素材の床を急ぎ足で立ち去ったのでは確実にベタペタと音が鳴るでしょう。それが少しも聞こえなかったということは、やはりそこには誰もいなかったのです。

俺はすぐさま逃げるように駆け足で診療所を出て鍵をかけ、車に飛び乗り、帰路を急ぎました。その間も、帰宅してからも、ベッドに潜つてからも、あのコトコトという音は耳にこびりついて、いつまでも消えませんでした。そうして、一睡もできないまま翌朝を迎えたのです。

えたのです。

ここまできたら、さすがに俺ももう我慢の限界でした。

そして度々起こる診療所の怪異の原因は、勤務初日に届いたあの手紙にあるのではないかと思うようになりました。あれはきつと、退職していった前任の臨床検査技師の悪意ある嫌がらせなのです。

『呪いの手紙』なんて、子どもじみたはずらのようではありますが、おそらくなんらかの事情で辞めざるを得なくなった前任者が、後任に決まった俺への当てつけのような、あるいは大学病院のコネですんなりと採用された俺への恨みのような、そんな感情で送りつけてきたものだったのではないのでしょうか。

そう考えると、顔も名前も知らぬ前任の臨床検査技師への恨みがふつふつと湧いてきました。

あんな手紙があるから恐ろしい目に遭うのかもしれない。

そんな思いもありましたが、こうなるとあの手紙は動かぬ証拠となりうるため、まだ捨てずに車の助手席のダッシュボードの中に入れたままにしてあります。

今日、これから、俺はなんとしてでも診療開始時間前に瀬川先生か葛西看護師をつかまえて、この手紙に書かれている怪奇現象が実際に起こっており悩まされていることを伝え、前任の臨床検査技師について問い質してやる。

そんな決意を胸に、俺は睡眠不足の身体をとびつきり濃く作ったコーヒーで奮い立たせ、車に乗り込んだのでした。

「この手紙と内容に心当たりはありませんか?」

診療所に着くなり、俺は診察開始の準備をしている最中だった瀬川先生に例の手紙を差し出しながら詰め寄りました。

俺はこの時、きつと怒っているような表情を浮かべていたのでしょう。瀬川先生は気圧されたようにポカンとしていました。そんな瀬川先生に、俺は捲まし立てます。

「俺がこの診療所に来てから、不可解なことが起きているのはお伝えしていましたよね。この手紙にはその怪異が警告のようなかたちで書かれているんです。俺がここに初出勤する朝、家に届いたものです」

俺が興奮気味に話しているのを聞いて、葛西看護師も受付から診察室に出てきました。

何が起きているのかと不安そうな表情を浮かべていますが、そこにフォローを入れるほどの余裕は俺にもありません。

「見てください。この手紙を!」

俺が差し出した手紙を瀬川先生の手押し付けると、彼はようやく受け取り、便箋を取り出して開きました。

そして、数行記されている文章を目で追い始めます。その目には、明らかに困惑の色が映し出されていました。

すべての文章を読み終えたことを察すると、俺は小柄な瀬川先生の華奢な両肩を掴み、迫りました。

「ここに書かれていることのほとんどが、すでに俺の身に起きているんです! それどころか昨日なんて、無視しているのに何度も何度も『お願いしまあす』って声が聞こえてきたんですよ! 検体置き場に物を置く音だつて、何度も何度も。こつちを向けて俺に催促するように。それでも俺は無視していました。そうしたら最後には怒ったように、ガシヤーンってガラスが割れるような音がして!!」

「田口さん、落ち着いて」

葛西看護師がオロオロしながら近づいてきたので、今度は矛先を彼女に向けて俺は言いました。

「葛西さんも何か知っているんじゃないですか!? あの声は葛西さんみたいに甲高い女性の声なんです! だけど、振り返っても、誰もいないんです!!」

しかし葛西看護師は困った表情で目をそらすだけでした。葛西看護師に聞いても埒が明かないと感じた俺はもう一度瀬川先生のほうを向き直ります。

すると、瀬川先生はさつきまでの呆気にとられた表情から一変して、恐ろしいほどの真顔でこちらを見つめていたのです。それはまるで、初出勤日に急患がやってきて、「あの患者は助からないでしょう」と言った時の顔を思い起こさせるものでした。

哀れみも、悔恨も、一切の感情が読み取れない、ただ事実のみを伝える表情。それを見て、俺の背筋にゾツと寒気が走りました。

ですが、俺も怯むわけにはいきません。今日、この場で真相なり対策なりを明らかにしなければ、この先もここで働く限りずっとあのような恐怖に怯えることになるのですから。「あれは一体、なんなんですか。先生たちもここで起きる怪異のことは知っているんじゃないませんか」

俺がまっすぐ見据えて尋ねると、瀬川先生はチラと葛西看護師に視線を送り、小さく頷く仕草を見せました。すると葛西看護師もコクリと頷いて返し、恐る恐る口を開きました。

「……田口さん、よく聞いて。驚くかもしれないけど、決してパニックにはならず、落ち着いて聞いてください」

「……はい」

「あなたが来る前に働いていた、前任の臨床検査技師さんも、ある日こんなふうには、この診療所で妙なことが起こるって訴えてきたことがあったの」

「そう、なんですか」

これを聞いて、俺の中で立てていた仮説がひとつ繋がりました。やはりこの手紙の差出人は前任の臨床検査技師さんだったのです。

そして手紙の内容はイタズラやブラックジョークでも『呪いの手紙』でもなんでもなく、おそらくただの親切心による注意喚起のもりだったのでしょう。

前任の臨床検査技師さんはきっと、この診療所で起こる怪異に耐え切れず、これまでの俺のように瀬川先生や葛西看護師にも信じてもらえなかったため、退職する道を余儀なくされたのです。

ところがここで、ひとつどうしても避けられない疑問が湧いてきました。先日も瀬川先生に尋ねた、出勤初日の急患のことです。

あの時、謎の心電図を見つけた俺は、瀬川先生に見せました。

するとその後、瀬川先生と葛西看護師はすぐに町の総合病院と連絡を取り、急患の受け入れと転送の準備を進めていたように思います。

先日、瀬川先生は「偶然だ」とはぐらかしました。しかし、事の真相は違っていたのでしよう。そう、つまりあの日、急患が来ることをふたりは確信していたのです。

——ふたりは、前任の臨床検査技師の訴えを信じていたということに……なる？

すると、俺の疑問を察したのか、今度は瀬川先生が語りかけてきました。いつもの優しい口調ではありますが、感情の読み取れない無表情は崩さずに、です。

「田口くん。キミの前任者が訴えてくるようになったのも、きっかけは妙な心電図でした。キミの時と同じように、途中で心拍が止まってしまうデータです。それを見せられた私は、やはりパソコンが古いから起きたバグだろうと思いました。しかし、その日のうちに急患

が運ばれてきました。ですがその時は準備もできていなかったため、患者はこの診療所で亡くなってしまったのです」

「そんなことが……」

「そういうことがあったから、もしかしてと思って、同じような状況になった場合にはしっかり準備しておくようにと心に決めたんです。もちろん、前任の方もそれ以来、覚えのないデータは開かないようにしていたはずですよ。すみません。科学的根拠のない事象なので、キミには伝えることができずにここまで来てしまっただけです」

「いや、それはもういいです。いきなりそんなこと言われたって俺も信じられなかったでしょうから」

「ところが……」

「先生、これ以上は」

瀬川先生が何かを言いかけると、葛西看護師が諫めるような口調で割って入りました。

すると瀬川先生も「ああ、うん。そうですね」と言っただけで口をつぐみました。でも俺はどうしても続きが気になったので一歩前に詰め寄り尋ねました。

「何があったんですか。教えてください。ここまで聞かされたら全部話していただかない

と納得できません」

そう言つて、瀬川先生の目をジッと見つめると、少し間をおいてようやく彼も重い口を開きました。

「亡くなつたんですよ。臨床検査室で」

「え……?」

思いもよらない答えに、俺は一瞬凍り付きました。しかし最後まで話すと決めたのであろう瀬川先生は構わず続けます。

「私たちが気付いた時にはもう心肺停止状態でした。そして彼のパソコンには、見覚えのない心電図のデータが開かれていました」

「そのデータって……」

「後から気になつて、町の総合病院で彼が健康診断を受けた時の心電図のデータを見せてもらいました。間違いなく、彼のパソコンに表示されていたものと同じ波形を描いていました。心臓が止まったことを示すまでは……」

「ちよつと待つてください、前任の方は、退職されたんじゃない……」

「後任の方を募集するにあつて佐伯教授にはそのように伝えさせていただきました。あ

りのまま話そうとしたところで例の心電図と前任者の死の関連性など説明できないでしょう。それに、おかしな先入観や憶測を持たれて忌避されてしまうと、この診療所が立ち行かなくなつてしまいますから」

「そう、だつたんですか……」

「キミからその手紙を見せられて驚きました。なぜなら、この一連の不可解な出来事の裏にある事実を知っているのは、私たちふたりしかいないはずだつたからです。当然のことながら、その手紙の差出人は私たちではありません」

理解が追い付かない。これが俺の正直な感想でした。

それでは、この手紙を届けた差出人も誰だかわからなくなつてしまいます。

だつて差出人だと思つていた前任の臨床検査技師は、俺が初出勤の朝にはすでに、この世にいなかつたのですから。

ここまで聞かされたところで診察開始の時間となり、最初の患者がやってきたため話は終わりとなりました。俺もそのまま仕事に従事することになりましたが、後になつてもこの日のことはよく覚えていません。瀬川先生や葛西看護師になにか話しかけられても、上の空だつたと思います。

ただ、臨床検査室にひとりでいるのが無性に怖くなり、廊下の突き当たり、扉の前に延々と突っ立っていたことだけは記憶しています。

瀬川先生も葛西看護師も、俺の心情を察してくれてか、必要な検査があるとき以外も度々様子を見に来てくれて、それがとてもありがたく思えたのでした。

それからしばらくの間、そのように俺は仕事もなるべくひとりにならないよう過ごしていました。そして診察終了後、検査機器をへて帰るまでの時間も、できるだけ瀬川先生か葛西看護師に立ち会ってもらうようになりました。

いい大人がオバケのようなものを信じて「怖いから」なんて理由でここまでしてもらうのは情けなくもありましたが、ふたりも「それでお互い安心できるなら」と言って快く付き合ってくれました。

そのおかげもあつてか、その後数か月の月日が経つあいだ、これまで続いていた奇妙で恐ろしい出来事はバタリと止んだのです。

ただ、これで完全に問題が解消したというわけではありませんでした。このように過ごしているというのは、ずっと意識し続けていることの表れです。常に心的ストレスを抱えながら仕事をしているということに他なりません。日々の食事は思うように喉を通らず、

体重も減り、頬はゲツソリと痩せてしまいました。

そんな俺を先生は心配し、時折、栄養剤や抗不安薬などを処方してくれましたが、根本的な解決に至るものではありませんでした。

また、こうした不安は家にひとりでいる時にも襲ってくるようになりました。田舎の静かな一軒家は隣家とも少し離れており、住み始めた頃は生活音などにも気を遣わなくていいなと思っていたのですが、今は逆にこの静けさが得も言われぬ不安を煽ってくるのです。

果たして、あの恐ろしい『現象』は、診療所だけでのものなのでしょうか。

差出人不明の例の手紙が送られてきている以上、怪奇現象が家でも起こらないとは限りません。

いつか女性の声で「お願いしまあす」と聞こえてきたら……それを思うと、夜も落ち着いて眠ることができません。休日だつて心が休まる暇などありません。

一度だけ、以前まで勤めていた大病院の佐伯教授に助けを求めようと電話をしたことがあります。

しかし、どんなにこちらでの出来事を訴えたところで信じてもらえないだろうと思ひ至

り、結局この話を切り出すことはできませんでした。当たり障りのない近況報告から、佐伯教授の日頃の愚痴や自慢話を聞くことに終始して、余計なストレスを感じつつ電話を切ることになりました。

さらに最悪なのは、教授の口からハッキリと、帰って来ようと思っても元いた大学病院に戻ることはできないという旨を告げられてしまったことです。これで俺にはもう退路さえ断たれてしまったのだと悟りました。

もちろん、他所で求人を探し、イチから新たな職場を見つけるという手段も残されてはいましたが、この時の俺にはそんな気力も起らないほど疲弊してしまっていたのです。

ところが、いざこうして退路を断たれてみると、不思議なことに時間が経つにつれ徐々に俺はこの土地に骨を埋めるのだという覚悟のようなものが湧いてきました。諦めがついたというか、もうどうにでもなれ、死んだって構わない、そういつたやけっぱちの覚悟です。

ふと、診療所に勤めるよう勧めてきた時の佐伯教授の嫌味が頭の中をよぎりました。薄ら笑いを浮かべながら俺のことを「気楽な独り身」と言った、あの場面です。今のご時世、何らかのハラスメントに該当するであろうこの言葉が、まさか今になって力になるなんて思ってもみませんでした。ですが、確かに俺には妻も子もおらず、守るべきものなんてあ

りませんでしたから、これほどまでに腹を決めることができましたのでしよう。

この日から、俺は少しずつ食欲を取り戻し、健康状態も上向いてきました。瀬川先生にも、まるで憑き物が落ちたようだと言われ、自分でも鏡を見た時に、以前よりも表情に生気が戻ってきているのが感じられました。

瀬川先生や葛西看護師には、もうわざわざ手を煩わせてまで臨床検査室の様子を見る必要はないと伝え、検査機器のメンテナンスにも立ち会わなくていいと申し出ました。

それでも最初の数日間はまだ心配と見え、大した用事もないのにちよくちよく顔を出してくれましたが、その頻度もだんだんと少なくなっていきました。

そうして、肝が据わってからしばらく経った頃のことです。

いつものように臨床検査室に入り検査機器を立ち上げて、診療時間がやってくるのを待っていると、顕微鏡のステージの上に、作った覚えのない標本が置いてあることに気が付きました。

一瞬「なんだこれはと思い」覗こうとしましたが、俺はすぐに思い出しました。

『・作った覚えのない標本を顕微鏡で覗いてはいけません。』

例の手紙に記されていた箇条書きの中の一文です。

これまで、この手口は一度も起こらなかったのに、危うく忘れかけていました。

ただ、別に死んでも構わないと開き直つてみると、無性にこの標本がなんなのか、顕微鏡を覗いたら何が見えるのか気がなつてきます。

なるほど、これが『向こう』の思惑なのでしょう。

恐怖を乗り越え、警戒心を解きつつある今ならば、チャンスはあると踏んだのかもしれない。

まあ、さもこうして明確な『相手』が存在しているように考えていても、それが何者なのかは全くわからないのですが。とはいえ、この怪異の『目的』はわかつてきたように思えます。

それはもしかしたら、俺も含めた『誰か』の命を奪うことなのではないでしょうか。

ただこれに関してはあくまで想像の域を出していません。現に検査機器をべた後の「お願いしまあす」という声には最初の一回目で返事をしてしまつていますが、それ以上の何か

が起こつたわけではありませんでしたから。

とはいえ、自分以外の命が犠牲になる場合もあれば、無責任に手紙の『禁止事項』を破るわけにもいきません。

今思えば、あの手紙自体も、警告という体裁を取りながら、実は「破つてしまったらどうなるんだろう」と好奇心を刺激する小道具だったように思えます。

俺はムクムクと膨らんでいく興味を自制心で抑え、標本を顕微鏡のステージから取り上げると、そのまま廃棄することに決めました。

そのおかげもあつてか、この日、イレギュラーな出来事が発生することもなく、診察終了の時間を迎えることができました。やはり、あの手紙に書かれている内容を守つてさえいれば、それ以上は何も起きないようです。

この日以降、俺は絶対に禁を破らないと心に決めました。

今日、俺がこの診療所に初出勤してからちょうど一年が経ちます。

その間も度々、謎の心電図のデータや標本は何度も現れましたし、ひとりです検査機器の作業をし終えると女性の声で「お願いしまあす」という声が聞こえてきました。あの日

のように、しつこく声をかけてきながら検体置き場に練り返し検体を置く音が激しくなつていくパターンも、数える程度ではありますが起こりました。

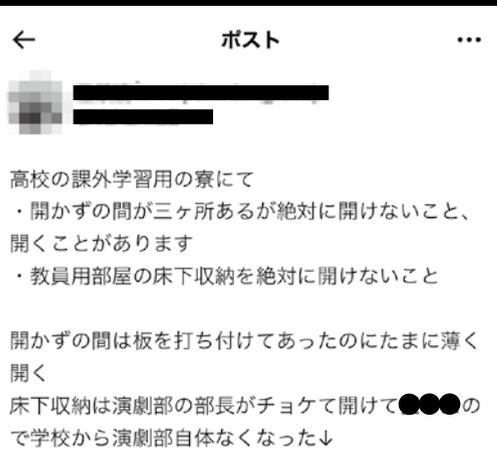
ですが、もはや一々動揺したり、過度に反応したりすることはありません。

覚えのないデータは消去、標本は廃棄、 $\times$ 後の声は無視の一択を徹底しています。そうして、この田舎の町で診療所と自宅を行き来しながら、平穏な、代わり映えのしない毎日を過ごしています。

ついでに言うと、相変わらず独り身なのも変わりません。これだけは変わってくれてもいいんですけどね。

# 寮

- 開かずの間が三ヶ所あるが絶対に開けないこと、開くことがあります
- 教員用部屋の床下収納を絶対に開けないこと









# 工場

- あるプラントでヘルメットが人の頭の高さでふわふわしているのを見た時は速やかに上司に報告する事
- ある作業を1人でしていると、隣のプラントから旧制服の人が見てくるから必ず2人作業をすること
- たまに場所が変わる電灯があるけど気にしないこと
- おーい！おーい！という呼びかけに反応しない。また、人を「おーい！」と叫ばないこと
- 特定の場所で後ろに気配を感じることがあっても、鏡等の反射で後ろを確認しないこと
- 部外者を発見したら報告すること(どこしか書いてない)

←

ポスト

...



弊社結構こういうのあって

- ・あるプラントで「ヘルメットが人の頭の高さでふわふわしているのを見た時は速やかに上司に報告する事
- ・ある作業を1人でしていると、隣のプラントから旧制服の人が見てくるから必ず2人作業をすること
- ・たまに場所が変わる電灯があるけど気にしないこと

# 病院

- その部屋のナースコールが鳴っても巡回しないでください。そこは物置です。
- 物置にはベッドユニットが完備されていますが所者を配置しないでください。そこは物置です。
- カメラ監視中、物置に入所者がいたら速やかにカメラを止めてください。そこは物置です。



ポスト



家族の職場で

- ・その部屋のナースコールが鳴っても巡回しないでください。そこは物置です。
  - ・物置にはベッドユニットが完備されていますが入所者を配置しないでください。そこは物置です。
  - ・カメラ監視中、物置に入所者がいたら速やかにカメラを止めてください。そこは物置です。
- ってのは聞いた。

